

日本海スルメイカ漁場調査 — 抄録 —

鈴木 史紀・青山 宝蔵・黄金崎栄一・伊藤 欣吾

発 表 誌 名

イカ釣り漁場開発資料18号（1993年5月）及び平成4年度外洋性イカ（スルメイカ・アカイカ）に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集（1993年5月）

抄録（日本海沿岸海域調査）

1992年5月から11月に試験船東奥丸・青鵬丸で北緯39度から43度、東経138度以東の日本海沿岸域で漁場調査を実施した。

＊青鵬丸の調査についてはマグロ延縄漁場開発試験事業（6月から9月）で行ったイカ釣り漁獲試験結果を資料として用いた。

1. 沿岸域におけるスルメイカの水揚げ動向について

本県日本海側主要4港の1992年の沿岸スルメイカ水揚げ量は、4,635トンで昨年の117%であった。ここ10年間でみると'89年に次ぐ高い水準であった。また、1日1隻当り漁獲量（CPUE）は560kgで、ここ10年間では最も高い水準であった。

1992年の初水揚げは5月22日に小泊港でみられた。

2. 沿岸域における漁場環境、分布、群の性状、移動について

(イ) 漁場環境について

1992年の定線海洋観測結果から本県沿岸の対馬暖流域の勢力は

3月“やや強勢”、4・9月は“やや弱勢”であった他は平年並みに経過した。（流量指標より）

(ロ) スルメイカの分布密度について（釣機1台1時間当り漁獲尾数）

5月下旬の沿岸域の分布密度は1尾以下と低かった。6月は3～17尾台で比較的安定した分布密度であった。7月の分布密度は3尾以下と低かった。8月の分布密度は4尾～15尾台と比較的安定していた。9月は北緯40度30分以南で分布密度は低かったがこの海域の以北では安定していた。10月以降は2尾前後で低かった。

(ハ) 群の性状

5～11月における本県沿岸域に來遊した群の性状を、外套長組成並びに成熟・交接状況等からみると、冬春季に発生した群の來遊が多かったものと考えられた。

(ニ) 海岸域における群移動

5月13～14日能登半島西沖で350尾の標識放流を実施。再捕尾数は15尾で再捕率は4.3%であった。移動はNE～ENE方向で佐渡近海での再捕が中心であった。9月23日～24日本県沿岸域で700尾の標識放流を実施。再捕尾数は2尾で再捕率0.3%であった。移動は2尾とも北上し、うち1尾は津軽海峡東部で再捕された。

抄録（日本海沖合海域漁場調査）

1992年5月から11月に試験船東奥丸で北緯36度から45度、東経 132度以東の日本海沖合域で漁場調査を実施した。

1. 沖合域におけるスルメイカの水揚げ動向について

日本海沖合域のスルメイカは主として凍結して水揚げされるが、本県での主たる水揚げ港である八戸・大畑港には38,166トンの水揚げがみられ、昨年の 144%であった。（但し、道東海域での操業分の漁獲量一部含む）

2. 沖合域における分布、群の性状について

(イ) スルメイカの分布密度について（釣機1台1時間当り漁獲尾数）

5月には能登半島で15.6尾、8月には大和堆北東沖で13.9尾、積丹半島北沖で28.3尾、西沖では34.4尾とCPUEの高い海域がみられた。

(ロ) 群の性状

成熟状況（雄）：成熟（半熟個体含む）個体の出現割合は8月が他の月と比べ高かった。

交接状況：交接個体の出現割合は8月が他の月と比べ高かった。